

生徒が生き生きと発言する授業

成果とともに見えてきた課題

先生方の研究授業を中心とした日々の授業の積み上げにより、明らかな成果が見えてきたと同時に、新たな課題も浮かんできました。

(1) しゃべらせてもらえない生徒

よく受動から能動へといいますが、そうたやすいことではありません。まだまだ多くの授業は、教師主導で生徒は受け身です。そのうえ、発問というか質問が一問一答式であるため、生徒は指名されても、一言、言葉を発して終わる授業をよく見ます。これでは、生徒の声はますます小さくなり、自分の言葉で説明したり、話したりすることはできないままになります。

授業者が生徒に聞いているはずなのに、自分で答えてしまっている授業もあります。生徒がしゃべらせてもらえないのです。

(2) 生徒の発表が当たり前の授業

「今日は誰に発表してもらおうかな」などと、さも生徒の発表が特別であるかのような授業を見ることがあります。「今日は○日だから○番」という指名もあります。指名では名前を呼んであげたいところです。生徒の発表が終わると、「ハイ、拍手」と生徒に拍手を要求する授業もあります。

ある生徒が一生懸命みんなの前で説明をした授業がありました。自然と拍手がわき起こりました。同じ問題に対して、何通りかの解き方をそれぞれの生徒が説明した授業がありました。その授業では拍手はありません。生徒が説明することが日常だからです。生徒の発表が当たり前になる授業を期待します。

(3) 人前で自分の考えを言える生徒

昨年度からずっと、授業中の生徒の声が小さいことが気になっていました。生徒は集中して一生懸命に学習に取り組んでいます。にもかかわらず、発表の際の声が小さいのです。

世の中は、どのような人材を求めているのでしょうか。私たちは、先生の指示に素直に従う生徒を育成したいのでしょうか。人前で自分の考えや思いを言える生徒を育成したいのでしょうか。今のままで、本校の生徒は、社会に出て困ることはないのでしょうか。

授業を見ていると、一問一答式の単語で答えるパターンが多く、文や文章で答える機会が少ないのです。先生と生徒とのキャッチボール型が多く、バレーボール型が少ないのです。いわゆる授業者のコーディネートを見る機会が少ないのです。

発表による学習の広がりや深まり

3学期は、生徒にもっとしゃべらせるために、授業者のしゃべりを減らし、自力解決でも、班での話合いでも、振り返りでも、書いたら発表させてはどうでしょうか。生徒は、他の人はどんなことを考えているのか、どんなことを書いているのか、気になるものです。発表により、学習に広がりや深まりも出てきます。きっと生徒は少しずつ変わってくるはずです。

パターンABCによる1人2回の研究授業により、リーディングスキルをはじめ、多くの収穫がありました。特にパターンCでは、授業を改善するという経験ができた方も多いのではないのでしょうか。一人も取り残さない授業を見ることもできました。授業をもっとよくしようという先生方の授業改善への意欲ならびに姿勢、実践力に、心より敬意を表します。ありがとうございました。